

理念の無い「怪奇」——太学体排斥の理由について——

渡部雄之

はじめに

北宋の人孫覺（一〇二八—一〇九〇）が欧陽脩（一〇〇七—一〇七二）に、どうすれば文章が上達するかを訊ねたところ、「特別な方法は無い。ただ読書に励み、そして多く作れば自ずと上手くなる。」と言われた話が、『東坡志林』巻一に見える。欧陽脩が後学に与えたことばは当たり前といえは当たり前のことだが、彼でさえ良い文章を書くためには、相当な修練や思索を要したであろうことが、「特別な方法は無い」という素っ気ない発言から窺える。如何にすれば良い文章が書けるか、あるいはそもそも良い文章とは何かということは、もとより答えを出すことが困難な問いではある。しかし、文学に携わる者であれば誰もが一度は自らに投げ掛ける問いであろう。唐宋八大家の一人として仰がれる蘇軾（一〇三六—一一〇一）がこの話柄を記録するのも、文章修練の方法が彼にとっても大きな関心事であり、欧陽脩の当たり前のことばが心に響いたであろうことを示している。

唐代から宋代にかけての古文復興では、欧陽脩、蘇軾

を含め、多くの古文家の手によって、より良い文章を追求すべく理論、実作両面で様々な試みがなされた。中でも今日の我々の目に特徴的に映るのは、「怪奇」の尊重である。「怪奇」とは、規範からの逸脱である。あるものが衆多、尋常あるいは正統であることを以て規準と看做された時、そこから外れる事象には「奇」や「怪」といった評価が下される^[1]。はじめに中唐の韓愈（七六八—八二四）を中心とするグループが内容、表現において他とは異なること、前人とは違うことを良しとする主張を行い、時に難解、奇異に過ぎると思われるような独創的な作品を多く生み出した。その後古文復興そのものが退潮期となった晩唐、五代には「怪奇」もまた影を潜めたが、韓愈が再発見された宋初以降再び姿を現し、中期には太学体という名称が与えられる程の流行を見せた。ただ、時を同じくして批判の声もまた次第に高まり、「怪奇」な文章は反対者の手により、その出現の度に斥けられた。太学体も、張方平（一〇〇七—一〇九一）、欧陽脩の二人によって排斥されている。人の意表を突くことに拘るあまり、ややもすれば難読やでたらめに陥る「怪奇」は、

歴代の文論においてもかく非難されがちであった。しかしながら、韓愈らの活躍した元和年間（八〇六—八二〇）から二百年以上に渡って、そうした奇抜さや独自性を重んじる風潮が時に顕在化したこともまた確かなのである。

かように一筋の流れを形成したとも見られる古文の「怪奇」であるが、実は太学体の前後でその様相をやや異にする。本稿では、太学体の「怪奇」をそれ以前の古文の「怪奇」と比較することで、太学体が欧陽脩らによって排斥された理由を明らかにする。なお、以下に引用する各資料において、「怪奇」という概念は「怪」「奇」「險」「僻」「誕」「難」「洪」といった様々な語で表され、それぞれニュアンスに違いがあるが、本稿では論旨に支障の無い限り「怪奇」の語で統一して論を進める。

二 太学体——科挙に密着した「怪奇」——

太学体は、次に引く『続資治通鑑長編』元祐七年（一一〇九二）の記述から、少なくとも異なる二つの時期に流行した文体の総称だと考えられる^[2]。

〔四月甲寅（二日）〕左正言姚勔言、「……往時開封舉人路授倡爲長賦幾千言。但爲浮辭、不求典要、當時能文者往往效之。得張方平擯斥而其文遂正。嘉祐初、劉幾輩喜爲怪僻。得歐陽修革去而其風復雅。……

……」
左正言姚勔言ふ、「……往時開封の舉人路授倡へて長賦幾千言を爲る。但だ浮辭を爲り、典要を求めず、當時の文を能くする者往往之に效ふ。張方平の擯斥するを得て其の文遂に正さる。嘉祐の初め、劉幾の輩喜びて怪僻を爲す。歐陽修の革去するを得て其の風復た雅たり……」と。

張方平、欧陽脩の二人は、それぞれ別の年の科挙で弊害のある文章を斥けた。「其の文遂に正さる」「其の風復た雅たり」とあることから、各時期に流行した「怪奇」はその都度否定され、姿を消したことが分かる。前者が「長賦幾千言」「但爲浮辭、不求典要」を糾弾され、後者が「怪僻」を批判されており特徴が相異なることも、二つの太学体が連続するものではないことを示している^[3]。

最初の太学体の発生から流行に至るまでの経緯、及びその特徴については、張方平が慶暦六年（一〇四六）に権同知礼部貢舉を務めた際に奉った上奏文（貢院請誠励天下舉人文章奏）、『樂全集』巻二〇）に具体的な記述が見られる^[4]。

伏以禮部條例、定自先朝、考較升黜、悉有程式。自景祐元年有以變體而擢高第者、後進傳效、因是以習、爾來文格日失其舊、各出新意、相勝爲奇。至太學之建、直講石介課諸生、試所業、因其好尚、而遂成風。

以怪誕詆訕爲高、以流蕩猥煩爲贍、逾越規矩、或誤後學。朝廷惡其然也、故下詔書丁寧誠勵。而學者樂於放逸、罕能自還。今貢院考試諸進士、太學新體間復有之。其賦至八百字已上、而每句有十六、十八字者。論有一千二百字以上。策有置所問而妄肆胸臆、條陳他事者。

伏して以へらく禮部の條例、先朝より定まり、升黜を考較し、悉く程式有り。景祐元年 變體を以て高第に擢せらるる者有りて自り、後進傳なづかへ効ひ、是れに因りて以て習ひ、爾來 文格 日に其の舊を失し、各おの新意を出だして、相ひ勝るを奇と爲す。太學の建てらるるに至り、直講石介 諸生に課し、業とする所を試むること、其の好尚に因り、而して遂に風を成す。怪誕詆訕を以て高と爲し、流蕩猥煩を以て贍と爲し、逾いよ規矩を越え、或いは後學を誤らす。朝廷其の然るを惡み、故に詔書を下して丁寧誠勵す。而るに學ぶ者 放逸なるを樂しみ、能く自ら還ること罕なり。今貢院 諸進士を考試するに、太學新體間復た之有り。其の賦は八百字已上に至りて、毎句に十六、十八字の者有り。論は一千二百字以上有り。策は問ふ所を置きて妄りに胸臆を肆にし、他事を條陳する者有り。

景祐元年（一〇三四）の科挙で「變體」によつて上位及第した者が出て以降、「新意（＝新奇なものの方）」を

嘉祐中、士人劉幾累りに國學第一人と爲り、驟かに怪險の語を爲る。學ぶ者翕然として之に效ひ、遂に風俗を成す。歐陽公 深く之を惡む。會たま公 主文たり、痛懲せんことを決意す。凡そ新文を爲る者は、一切棄黜す。時體之が爲に一變するは、歐陽の功なり。一舉人有り論じて曰く、「天地軋り、万物茁え、聖人發る」と。公曰く、「此れ必ず劉幾なり」と。戯れに之に續けて曰く、「秀才刺り、試官刷く」と。乃ち大朱筆を以て横に之を抹して、首自り尾に至り、之を紅勒帛と謂ひ、大紕繆字と判じて之を榜す。既にして果たして幾なり。

太學の首席劉幾（一〇三〇～一〇六五）の影響で受験生の間に「怪險の語を爲る」風潮が生まれた。太學での流行が、さらに上の科挙の場へと広がっていった様子が窺える。

右の記事には、「怪險の語」の実作がほんの一部ではあるが挙げられている。まず、劉幾の書いた論の「天地軋、万物茁、聖人發」の三句は、各句の三字目「軋」「茁」「發」が入声十四點韻で押韻している。劉幾が論という文体において、伝えんとする内容に最も適したことを選ぶことよりも、三字句で韻を踏むという表現面を優先したことを歐陽脩は嫌ったものと思われる。劉幾の答案を見た歐陽脩が戯れに作った「秀才刺、試官刷」各句の三字目「刺」「刷」が、それぞれ入声十二曷韻、入声十七薛韻で、

示すことで他の者に勝ろうとする傾向が受験者の間に生まれた。慶曆四年（一〇四四）には、太學の設置によつてこの傾向が強まり、「太學新体」と名付けられる程の流行を見せたという。科場、太學という限定された場でのみ流行し、また「相ひ勝るを奇と爲す」というように、受験者同士の競争意識によつて作られた「怪奇」な文章は、右の引用の冒頭で「禮部條例」「程式」といったことが使われ、後半で賦、論、策三つの文体に関する具体的な問題点の指摘が行われていることから、科挙の規程からの逸脱を特徴とするものであったと分かる。右の『続資治通鑑長編』に見えた「長賦幾千言」「但爲浮辭、不求典要」がこれに相当する。このように「太學新体」は、種々の点で科挙の在り方に密接に関係する「怪奇」を特徴とする文体であつた。

一方、歐陽脩が斥けた太學体（以下「嘉祐の太學体」と称す）に関しては、『夢溪筆談』巻九「人事一」に次のような記事がある⁶⁾。

嘉祐中、士人劉幾累爲國學第一人、驟爲怪險之語。學者翕然效之、遂成風俗。歐陽公深惡之。會公主文、決意痛懲。凡爲新文者、一切棄黜。時體爲之一變、歐陽之功也。有一舉人論曰、「天地軋、万物茁、聖人發。」公曰、「此必劉幾也。」戲續之曰、「秀才刺、試官刷。」乃以大朱筆橫抹之、自首至尾、謂之紅勒帛、判大紕繆字榜之。既而果幾也。

ゆるやかにではあるが押韻して皮肉っていることから分かる。

『夢溪筆談』の記事は続けて、数年後、歐陽脩が殿試の試験官を務めた際のことを記録する⁷⁾。

復數年、公爲御試考官。而幾在庭。公曰、「除惡務力。今必痛斥輕薄子、以除文章之害。」有一士人論曰、「主上收精藏明於冕旒之下。」公曰、「吾已得劉幾矣。」既黜、乃吳人蕭稷也。復た數年にして、公 御試考官爲り。而して幾 庭に在り。公曰く、「惡を除くに力を務む。今必ず輕薄子を痛斥して、以て文章の害を除かん」と。一士人有り論じて曰く、「主上冕旒の下に精を收め明を藏む」と。公曰く、「吾已に劉幾を得たり」と。既に黜くるに、乃ち吳人蕭稷なり。

「精明」は聡明なさまを表し、それを「冕旒（＝天子の冠）」の下に「收藏（＝集める）」すると表現することで、天子の下に優れた人材を集めようとしていることを称えたわけである。内容的には科挙の答案としてよく見られるものであるため、ここの論という文体において、表現の新奇さを求める姿勢が過度に表れていることを歐陽脩は嫌ったのだと思われる。嘉祐二年の科挙から五、六年して文章の風格は変じたという⁸⁾から、本例は太學体

の余風が表れたものと言える。

『夢溪筆談』の他、歐陽脩の息子発（一〇四〇～一〇八五）の書いた「先公事迹」の細字注にも、太学体の実作の引用が見られる。

嘉祐二年、先公知貢舉。時學者爲文以新奇相尙、文體大壞。僻澁如狼子豹孫、林林逐逐之語、怪誕如周公佾圖、禹操畚鍤、傳說負版築、來築太平之基之說、公深革其弊、一時以怪僻知名在高等者、黜落幾盡。
嘉祐二年、先公 知貢舉たり。時に學ぶ者 文を爲るに新奇を以て相ひ尙び、文體大いに壞る。僻澁は狼子豹孫、林林逐逐たりの語の如く、怪誕は周公佾圖かしめ、禹畚鍤を操り、傳說 版築を負ひ、來たりて太平の基を築くの説の如し。公深く其の弊を革め、一時に怪僻を以て名を知られ高等に在る者、黜落して幾ど盡く。

太学体の特徴を、「僻澁（「めつたに見られず、難しくて意味の通じにくいさま）」と「怪誕（「いいかげんで、でたらめなさま）」の二つの評語で表す。まず「僻澁」の例に関して、許外芳氏は「狼子豹孫」を唐・李商隱「唐容州経略使元結文集後序」（『李義山文集』巻四）の「狼子豹孫、競于跳走、剪餘斬殘、程露血脈。」（狼子豹孫、跳走を競ひ、餘りを剪り殘りを斬りて、血脈を程露す。）に基づくものとし、「林林逐逐」は唐・柳宗元「貞符」（『柳宗元集』巻二）の「惟人之初、總總而生、林林而群。」（惟

れ人の初め、總總として生まれ、林林として群る。）に見える「林林總總」のことであると述べて、僻典の例とする⁹⁾。

次の「怪誕」の例でも、典拠のありそうなことが使われる。一句目の「周公佾圖」は『尚書』周書・洛誥の「予惟乙卯、朝至于洛師。我卜河朔黎水。我乃卜澗水東、澠水西、惟洛食。我又卜澠水東、亦惟洛食。俾來以圖、及獻卜。」（予惟れ乙卯、朝に洛師に至る。我 河朔の黎水を卜ふ。我乃ち澗水の東、澠水の西を卜ふに、惟れ洛食す。我又た澠水の東を卜ふに、亦た惟れ洛食す。俾來たるに圖を以てし、及び卜を獻ず。）¹⁰⁾、三句目の「傳說負版築」は『孟子』告子章句下の「孟子曰、『舜發於畎畝之中、傳說舉於版築之間、膠鬲舉於魚鹽之中、管夷吾舉於士、孫叔敖舉於海、百里奚舉於市。』」（孟子曰く、「舜は畎畝の中より發こり、傳説は版築の間より舉げられ、膠鬲は魚鹽の中より舉げられ、管夷吾は士より舉げられ、孫叔敖は海より舉げられ、百里奚は市より舉げらる」と。）を踏まえる。二句目に関しては出典は不明であるが、「畚（「もつこ）」「鍤（「すき）」という農具の名が使われ、周公、傳說同様、建築に関わる内容となっていることから、あるいは治水の神である禹にまつわる話として、當時見られたものがあつたのかもしれない。したがって本例は、經書等を典拠とするように見える真偽定かならぬ説を述べたものとなる。ここで論者は、傳説のような有能な臣下が身分の低い者の中から出てきたことを示すこ

とで、自身の考える理想的政治の在り方や、受験者たる自身の採用を主張することになる。

かように、歐陽脩が斥けた「嘉祐の太学体」は、先の「太学新体」と異なり規程からの明確な逸脱を行う訳ではないものの、やはり科挙を強く意識し、内容、表現両面で過度とも言ふべき独自性を追求するものであつた。そのことは、科挙で課せられる論という文体にそぐわないことを問題視した『夢溪筆談』の引例や、自らを傳説に仮託して採用を求めた「先公事迹」の引例によく表れている。慶暦の頃と同様、嘉祐年間の受験者の間には、たとえ難澁、でたらめという負の評価が下される恐れがあろうと、他とは違う表現や内容を持った文章こそが登第への捷徑であるという認識があつた。そうした認識の広がりとは他でもなく、当時太学体が、科挙及第という自己の立身に直に結び付く結果をもたらしたが故に生まれたのだと考えられる。科場、太学という特定場で、自己の立身という限定された目的を持って生み出されたものの、それが北宋中期の「怪奇」であつた。

三 太学体以前

― 時文への対抗意識による「怪奇」 ―

宋初の古文家范杲（生没年不詳）の伝（『宋史』巻二四九）に「范杲」爲文深僻難曉、後生多慕效之。」（文を爲りて深僻にして曉り難く、後生多く慕ひて之に效

ふ。）とあるように、太学体流行以前にも「怪奇」な古文を作る者は相当数いた¹¹⁾。だが一方で、文章は平易であるべきだと主張する者もあり、後に彼ら平易を主張する側が主流の位置を占めたことで、「怪奇」は古文復興の歴史の中で弊害の一つとして位置付けられるようになった。その結果、「怪奇」を尊んだ人々の文章の多くは今の世に伝えられなくなった。したがって、この時期の「怪奇」が如何なるものであつたかを窺うためには、主に平易を主張した側の資料を用いるしかない。

まずは柳開（九四七～一〇〇〇）の「応責」（『河東先生集』巻二）の一部を引用する¹²⁾。

或責曰、「子處今之世、好古文與古人之道、其不思乎。苟思之、則子胡能食乎粟、衣乎帛、安于衆哉。衆人所鄙賤之、子獨貴尚之、孰從子之化也。忽焉將見子窮餓而死矣。」柳子應之曰、「……子責我以好古文。子之言何謂爲古文。古文者、非在辭澁言苦、使人難讀誦之、在于古其理、高其意、隨言短長、應變作制、同古人之行事、是謂古文也。……」

或ひと責めて曰く、「子 今の世に處るも、古文と古人の道とを好むは、其れ思はざるか。苟くも之を思はば、則ち子胡ぞ能く粟を食らひ、帛を衣て、衆を安んぜんや。衆人の之を鄙賤する所、子獨り之を貴尚すれば、孰か子の化に従はんや。忽焉として將に子の窮餓して死するを見んとせん」と。柳子之に應

へて曰く、「……子 我を責むるに古文を好むを以てす。子の言 何をか謂ひて古文と爲す。古文は、辭澁言苦にして、人をして之を讀誦し難からしむるに在るに非ず、其の理を古にし、其の意を高くし、言に隨ひて短長し、變に應じて作制し、古人の行事に同じくするに在り、是れを古文と謂ふなり……」と。

今の世におりながら古文や古人の道を好むことを責める「或ひと」に対し、作者柳開はあなたの言う古文とは何なのかと問うた後、古文とはことばがごちなく、読み上げにくいものではないと述べる。ここに登場する「或ひと」は、古文に理解を示さなかった同時代人の一般的認識を代弁したものだと思われる。その人物に対し、柳開がわざわざ古文の本質が「辭澁言苦」にはないと述べることから、当時の一般的な人々は、古文に対し難読という印象を抱いていたことが逆に窺える。同時にそれは、大方の古文家の作風が実際にそのようであったことを物語っている。同様のことは、宋初に生きた僧智円（九七六―一〇二二）『送庶幾序』（『閑居編』卷二九）の「非止澁其文字、難其句讀、然後爲古文也。」（止だに其の文字を澁にし、其の句讀を難にして、然後 古文と爲すのみに非ざるなり。）という一文にも表れている¹⁴⁾。

では「怪奇」を尊重する古文家は、一体如何なる意識のもとで難解な文章を作ったのだろうか。王禹偁（九五四―一〇〇一）が自らに文章を献じてきた張扶（生没年

不詳）という若い士人に送った書簡（「答張扶書」、『小畜集』卷一八）を見ると、

「僕」爲子力讀十數章、茫然難得其句、昧然難見其義、可謂好大而不同俗矣。夫文傳道而明心也。古聖人不得已而爲之也。且人能一乎心、至乎道、修身則無咎、事君則有立。及其無位也、懼乎心之所有不得明乎外、道之所畜不得傳乎後。于是乎有言焉。又懼乎言之易泯也。于是乎有文焉。信哉、不得已而爲之也。既不得已而爲之、又欲乎句之難道邪、又欲乎義之難曉邪。必不然矣。

子の爲に力めて十數章を讀むに、茫然として其の句を得難く、昧然として其の義を見難く、大を好みて俗に同じくせずと謂ふべし。夫れ文は道を傳へて心を明らかにするなり。古の聖人已むを得ずして之を爲すなり。且し人能く心を一にし、道に至らば、身を修むれば則ち咎無く、君に事ふれば則ち立つ有り。其の位無きに及べば、心の有する所 外に明らかにするを得ず、道の畜ふる所 後に傳ふるを得ざらんことを懼る。是に于いてか言有るなり。又た言の泯び易きを懼るるなり。是に于いてか文有るなり。信なるかな、已むを得ずして之を爲すや。既に已むを得ずして之を爲し、又た句の道ひ難きを欲するか、又た義の曉り難きを欲するか。必ず然らざるなり。

とある¹⁵⁾。王禹偁は張扶の作品十數篇に対し、句の切れ目がはつきりせず、意味がよく分からないと指摘している。そして、古の聖人は政治において自らの道を伝え、考えをはつきりと示すことのできる立場にない場合に、やむを得ず文章によってそれらを示したのであり、彼らの作る文章は口誦しにくくも意味が取りづらくもなかったと述べて、平易の重要性を説く。難解な文章を作る張扶の姿勢を評したことばのうち「俗に同じくせず」は、本書簡の後半で引用する韓愈「国子助教河東薛君墓誌銘」（『朱文公校昌黎先生集』卷二四）にも見られる。韓愈は、薛逢という人物が、作文において「務出於奇、以不同俗爲主」（務めて奇を出だし、俗に同じくせざるを以て主と爲）したことを称えた¹⁶⁾。ここで言う「俗」とは、各時代に流行していた、あるいは主流であった文章、及びその制作に励んでいた人々を侮蔑的に評したことばである。彼ら「怪奇」を志向した者たちの意識の根底に、俗への対抗意識が窺える。

ただしこうした世俗への対抗意識は、「怪奇」に走った者たちだけでなく、平易を主張した古文家にも認められる。例えば王禹偁も、張扶に宛てた二通目の書簡（「再答」、同上）の中で、自らの作る古文が時代の好尚に合わないことを述べた韓愈「与馮宿論文書」の一節を引き、「今之世亦然也。」（今の世も亦た然るなり。）とする。また先に取り上げた柳開も、「応責」の引用箇所続きに「子不能味吾書、取吾意、今而視之、今而誦之、不以古道觀吾

心、不以古道觀吾志。吾文無過矣。吾若從世之文也、安可垂教于民哉。亦自愧於心矣。欲行古人之道、反類今人之文、譬乎游于海者乘之以驥。可乎哉。苟不可、則吾從於古文。」（子 吾が書を味はひ、吾が意を取る能はざるは、今にして之を視、今にして之を誦へ、古道を以て吾が心を觀ず、古道を以て吾が志を觀ざればなり。吾が文過ち無し。吾若し世の文に従はば、安くんぞ教へる民に垂るべけんや。亦た自ら心に愧づるなり。古人の道を行はんと欲するも、反つて今人の文に類するは、海に遊ぶ者之に乗るに驥を以てするに譬ふ。可ならんや。苟くも可ならずんば、則ち吾 古文に従はん。）と記している。そもそも古文復興が当時主流の文章、所謂時文に対する反撥を契機として始まったことを考えれば、平易派、怪奇派を問わず、全ての古文家に時文を俗であるとする意識が窺えるのは当然と言えよう。つまり両者の違いというのは、古文の精神である古道を、誰もが分かり易い内容、表現によって伝えようとするのか、内容、表現共に時文の規範から大きく外れた文章によって示そうとするのかという点にあるのである。

さて、一連の流れのものと見られる北宋初期と中期の古文の「怪奇」は、その淵源をたずねると中唐の韓門に行き着く。例えば宋初の文人孫冲（生没年不詳）は「重刊絳守居園池記序」（『山右石刻叢編』卷一一所収）において、樊宗师「絳守居園池記」が大変難解であることを述べた後、以下のように記す。

唐室承齊、梁、陳、隋餘弊、其文章最微弱、又變其體、使有聲韻耦對。唐享年尤遠、繇是鼓而成風。其間忽有韓愈、獨與張籍、皇甫湜、李翱輩更迭文體、高出秦、漢、亦大爲當時衆口排擯、謂之無用之文。韓愈死、其道彌光、後來有學韓愈氏爲文者、往往失其旨、則汨沒爲人所鄙笑。今則尤甚。

唐室 齊、梁、陳、隋の餘弊を承け、其の文章最も微弱にして、又た其の體を變じ、聲韻耦對有らしむ。唐の享年尤も遠く、是れ繇り鼓して風を成す。其の間 忽として韓愈有り、獨り張籍、皇甫湜、李翱の輩と文體を更迭し、高く秦、漢に出づるも、亦た大いに當時の衆口に排擯せられ、之を無用の文と謂はる。韓愈死し、其の道 彌いよ光るも、後來 韓愈氏を學びて文を爲る者、往往其の旨を失ふ有れば、則ち汨沒して人の鄙笑する所と爲る。今は則ち尤も甚だし。

韓愈の死後、彼の考えを正しく継ぐことのできなかった古文家がしばしば難読の文章を作り、宋初には甚だしい状態に至った。怪奇派の古文は、難解であつてこそ古文であるという、韓愈の文学に対する誤解によつて作られたと考えてよい¹⁶⁾。

中唐の「怪奇」に関しては多くの先行研究があるが、本稿の内容に即して言えば、音律、対偶、典故等、言語

という伝統的文学觀を受け継いでいる。中唐において「怪奇」は、文章を万世に伝える文彩とも看做されていた¹⁸⁾。韓愈等によつて始められた「怪奇」への志向は、時文への反撥と文章の永続性の希求という理念に支えられていたと言えるであろう。

四 太学体の排斥

―理念を失った「怪奇」の否定―

ここまで述べたように、「怪奇」の相異を太学体の前後で比較すると、

○太学体はその名の示す通り、科挙及びその予備校的存在である太学という、きわめて限定された場でのみ見られた。これに対し、太学体以前の「怪奇」はより広い場で作られる文章に現れた。

○宋初は、現存する資料を欠くという制約のため難解、難読という批判があつたこと以外あまり実態を窺い知ることができない¹⁹⁾が、中唐では前人の使わなかったことばや常用されない文字を使用する、敢えて四六の安定したリズムを大きく破る等の表現上の工夫や、前人の言わなかったことを述べるといった内容面での新しさを求めることが挙げられる。太学体の場合も資料の制約があるが、科挙で課される文章を念頭に置き、そこでの独自

の外面的な美を重んずる時文が必然的に内包する千篇一律に陥り易いという弊害に対し、それを克服せんとして試みられたものだともめられるだろう。具体的には、前人の使わなかったことばや常用されない文字の使用、あるいは四六の安定したリズムを大きく破るといった表現上の工夫、前人の言わなかったことを述べるといった内容面での新しさの追求が挙げられる。

また、中唐ではさらに別な目的によつても「怪奇」な文章が作られた。韓愈『送窮文』(『朱文公校昌黎先生集』卷三六)に次のようにある¹⁷⁾。

主人應之曰、「……又其次曰文窮。不專一能、怪怪奇奇。不可時施、祇以自嬉。……」……「五鬼」徐謂主人曰、「……人生一世、其久幾何。吾立子名、百世不磨。……」

主人之に應へて曰く、「……又た其の次を文窮と曰ふ。一能を専らにせず、怪怪奇奇たり。時に施すべからず、祇だ以て自ら嬉しむ……」と。……徐に主人に謂ひて曰く、「……人の一世に生くる、其の久しきこと幾何ぞ。吾 子の名を立つれば、百世磨せざらん……」と。

己の書いた文章が、たとえ今の世では受け入れられずとも、永く後世に伝わることを願う。韓愈もまた、「言之無文、行而不遠。」(言の文無きは、行はるるも遠からず。)

性を追求するという特色が認められる。

○太学体以前の古文家は、声律や対偶、典故等に意を用いる時文への反撥心が根底にあつたが、太学体においては、科挙の受験者が互いの競争心によつて、試験官に自らの文才を示すべく「怪奇」な答案を作成した。

と、三点にまとめられる。太学体の「怪奇」がそれ以前のものとは比べ、文章作成の場や特徴、文を作る意識等において様相を大きく異にするのは、当時科挙が官僚を選抜する制度として整備が進み、重要度を増していたことが背景としてあろう。立身を願う受験者が自らの思いを実現するため他者との差異を示そうとした結果が、「怪奇」となり易かつたのだと思われる。もちろん、規範に忠実に従いつつ見事な文章を作ることと自己の存在を示すのが本来あるべき姿だったろうと考えられるが、これは大方の受験者にとつては至難の業だっただろう。また、単に他との相異を示すだけならば、人々とは逆に極端に平易な文章を作るといったやり方も、あるいはあつたかもしれない。だが、科挙があくまで官僚たりうる才識を備えているかどうか問われる試験であつたことを考えると、そうした答案が評価されない可能性を無視できなかっただろう。一方、奇抜さや独自性を示すことは時に大きな価値を持つと同時に、方法としては比較的容易である。そのため、当時科挙を受験しようとする人々の多く

が「怪奇」を志向したのは自然なことだと言える。

ところで、太学体の流行に似た状況は、それ以前の科挙にもすでに存在した。真宗の大中祥符（一〇〇八〜一〇一六）から仁宗の景祐（一〇三四〜一〇三八）頃にかけては、楊億（九七四〜一〇二〇）、錢惟演（九六二〜一〇三四）、劉筠（九七一〜一〇三二）等を中心とする西崑派の美文が一世を風靡していた²⁰。欧陽脩『六一詩話』第二十一段（『欧陽文忠公集』巻一二八）には、

楊大年與錢、劉數公唱和、自『西崑集』出、時人爭效之、詩體一變。而先生老輩患其多用故事、至於語僻難曉、殊不知自是學者之弊。

楊大年 錢、劉數公と唱和し、『西崑集』出でて自り、時人争ひて之に效ひ、詩體一變す。而して先生老輩其の多く故事を用ひ、語僻にして曉り難きに至り、殊に自らはれ學ぶ者の弊なるを知らざるを患ふ。

と、当時の受験者が作制する詩のことが典故の多用により難解になったと記されている²¹。これは、科場が元来受験者同士の競争を促す場であったことによるであろう²²。

とはいえこの事實は、あくまで科挙が「怪奇」が流行するための土壌となり得たことを示すに過ぎない。筆者は、逆説的に言えば太学体の「怪奇」がそれ以前のもの

と異なる最大の要因は、文章の主流が古文へと移行したことにあると考える。「太学新体」の弊を述べた張方平の上奏文では、景祐元年の科挙がその始まりとされていたが、まさしくこの前後、三十年近くに渡って流行した西崑体の美文は勢力を失い、次第に古文重視へと向かっていく。美文中心であった中唐及び北宋初期には、主に時文への対抗意識から「怪奇」な文章が作られた²³。だが、古文が文章の主流となっていく北宋中期には、時文への対抗意識が次第に稀薄になるとともに、「怪奇」もまた明確な目的と意味とを失っていったことになる。時文とは異なる文章を生み出すという大きな目的を無くした「怪奇」は一般の文人からは顧みられることはなくなったが、ちょうど同じ頃制度の整備が進みいよいよ重要度を増した科挙へと入り込み、及第を願う受験者の心理と結び付くことで、実体を伴い大きく立ち現れた。実際、古文の「怪奇」に言及する景祐、嘉祐間の資料は、ほとんどが太学体関連のものとなっている²⁴。太学体は、ある意味で古文そのものが「時文」となりつつあった時代の流れに応じて生まれた、いわば畸形の「怪奇」であった。

先に述べたように、太学体は慶暦年間に流行した「太学新体」と、その十年後に現れた「嘉祐の太学体」とに分けられる。各時期に試験官を務めた張方平、欧陽脩は、その職務からして当然のことではあるが、両者が科挙に応じるために生み出されたという点をこそ問題視した。

張方平は、「貢院請誠励天下举人文章奏」の中でしきり

国史補」巻下に

元和已後、爲文筆則學奇詭于韓愈、學苦澁于樊宗师、歌行則學流蕩于張籍、詩章則學矯激于孟郊、學淺切于白居易、學淫靡于元稹、俱名爲元和體。

元和已後、文筆を爲せば則ち奇詭を韓愈に學び、苦澁を樊宗师に學び、歌行は則ち流蕩を張籍に學び、詩章は則ち矯激を孟郊に學び、淺切を白居易に學び、淫靡を元稹に學び、俱に名づけて元和體と爲す。

とある²⁵ように、元和年間には「奇詭」「苦澁」「流蕩」「矯激」「淺切」「淫靡」といった、多様な作風の詩文が存在した。いずれも肯定的とは言えない評価ではあるが、韓愈をはじめ張籍、孟郊、白居易、元稹等、今日の文学史では必ず言及されるはずの人物が名を連ねる。欧陽脩のことばは、彼ら中唐を代表する文人たちが活躍した「文章盛極」の時代に、「怪奇」という面で突出していたのが樊宗师であったと述べるものであり、全面的な否定の文ではないだろう²⁶。

欧陽脩には他に、樊宗师「絳守居園池記」に関連する詩（「絳守居園池」、『居士集』巻二、『欧陽文忠公集』巻二、全二十四句）が存在する²⁷。第一句から第八句では、樊宗师が文章を作る際に前人のことばを踏襲しなかったこと、「絳守居園池記」が『尚書』の句読を真似た難解なものであることを言う。続いて第九句から第十六句では、

に科挙の規程に言及していることから、それを破ることで他者との違いを示そうとする受験者の態度を問題視したのだと分かる。張方平には古文そのものに対する考えを述べた資料が乏しいため、その意図をはっきりと汲み取ることはできないが、おそらく自身の文学観に基づいて排斥を行ったというよりも、規程を破ることを許容すること、科挙という制度が揺らぐことを危惧したのであろう。

これに対し欧陽脩による「嘉祐の太学体」排斥には、彼の文学観が大きく関係している。そもそも欧陽脩は、一般には平易を志向した人物として知られるが、「怪奇」に対し全く否定的な態度を取っていた訳ではない。『集古録跋尾』巻九（『欧陽文忠公集』巻一四二）「唐樊宗师絳守居園池記」に

右「絳守居園池記」、唐樊宗师撰。或云、「此石宗师自書。」嗚呼、元和之際、文章之盛極矣、其怪奇至於如此。

右「絳守居園池記」、唐樊宗师撰。或ひと云ふ、「此の石 宗师自ら書す」と。嗚呼、元和の際、文章の盛極にして、其の怪奇なること此くの如きに至る。

とあり、「其の怪奇なること此くの如きに至る」に「怪奇」に対する反感が窺える。だが同時に注意すべきは、直前にある「元和の際、文章の盛極なり」である。李肇『唐

庭園の実際の風景と「絳守居園池記」の記述とを対照し、樊宗师が事物をあまりに細々と記録していることを述べる。ここまでは、歐陽脩は樊宗师の「怪奇」な文章に対し、否定的な態度を示している。ところが終わりに近い第二十三句になると、「我思其人爲躊躇」（我 其の人を思ひて爲に躊躇す）と、その態度をやわらげていることに気が付く。そこで直前の第十七句から第二十二句に目を向けると、次のようにある。

慮氏八卦畫河圖	慮氏の八卦	河圖を畫き
禹湯皐皐暨唐虞	禹湯皐皐より唐虞に暨ぶ	
豈不古奧萬世模	豈に古奧ならずして萬世の模ならんや	
嫉世姣巧習卑汗	世の姣巧にして卑汗に習るを嫉む	
以奇矯薄駭羣愚	奇を以て薄きを矯めて羣愚を駭かし	
用此猶得追韓徒	此れを用て猶ほ得たり韓徒を追ふ	

そもそも万世の模範となる文章は古く奥深いものであり、『尚書』を模倣した樊宗师の意図もそこにあったのだとする。さらに、当時は華麗で卑しい文章が蔓延っており、樊宗师は「怪奇」によってそれを正そうとしたのだと言う。「此れを用て猶ほ得たり韓徒を追ふ」とあるように、

は、若し事に臨むに因りて見はれずんば、則ち常を守り理に循ひ、衆人に異なる無し。苟くも衆に異ならんと欲すれば、則ち必ず迂僻奇怪を爲して以て德行の名を取りて、高談虚論して以て材識の譽を求む。前日の慶曆の學、其の弊是れなり。

もはや「怪奇」は、德行や才能、見識の評判を安易に得るための手段と墮していた。時文の弊を正し、さらには己の作品を後世に遺さんとした韓愈等の「怪奇」が、自己の外に向かつて、あるいは未来を見据えて試みられたものだとするならば、己の立身のため、科擧という一時の競争に勝つただけに追求された「怪奇」は、極めて内向きの、上辺ばかりの空虚なものだと言えよう。このように見るならば、劉幾の答案を斥ける際に歐陽脩が戯れに作った「秀才刺り、試官刷く」の二句（前掲『夢溪筆談』巻九）には、理念無き「怪奇」に對する彼の痛烈な批判の精神が諧謔の衣に裹まれつつ込められているように感じられる。

五 おわりに

最後に、本稿で扱った中唐から北宋中期までの「怪奇」の流れを改めて概観すると、時文への対抗意識から、それとは大きく異なる特徴を備えた文章を取って作った中唐、同様の意識を持ちつつも、難解こそ時文に対抗する

韓愈を中心とするグループとともに、時文の弊を改めるという共通の目的のために「怪奇」を志向したと歐陽脩は考えた。つまり歐陽脩は、「怪奇」を手放して良しとした訳ではなく、浮薄な文章ばかりが作られていた中唐のような時代に限定すれば、樊宗师の文章にもそれなりの意味があつたのだと、一定の理解を示したのである。

一方、彼が文壇、官界においてその地位を固めつつあつた慶曆頃には、世の趨勢はすでに古文重視へと向かつており、曾てのように時文への対抗意識を前面に押し出す必要性は薄れ、「怪奇」はそのような文章を作ることの意味を次第に失っていた。しかしながら科擧の受験生のみは、及第という自己の立身を求めるあまり、「益ます奇僻を相ひ習ふ」（『統資治通鑑長編』嘉祐二年）という有様であつた。そこには文章を万世に伝えんとした韓愈の如き崇高な理念は存在しない。歐陽脩は、科擧を主宰する前年の嘉祐元年（一〇五六）、學制に関する自らの意見を開陳した「議學狀」（『奏議』巻一六、『歐陽文忠公集』卷一一二）の中で、当時の学生の態度を批判し次のように述べる。

臣請詳言方今之弊。……夫人之材行、若不因臨事而見、則守常循理、無異衆人。苟欲異衆、則必爲迂僻奇怪以取德行之名、而高談虚論以求材識之譽。前日慶曆之學、其弊是也。

臣請ふ詳しく方今の弊を言はん。……夫れ人の材行

有効な手段だという思い込みから「怪奇」な文章が作られた北宋初期、そしてすでに世の中が古文重視へと向かい、もはや「怪奇」の意味が無くなりつつある中、科擧の受験生が及第という自らの目的を達する手段として、敢えて奇を衒つた答案を作成した中期というように、当初確固とした動機をもって始められた韓愈等の試みが、次第にその理念を薄れさせながら継承されていく過程のようにも見える。このことは、良い文章とは何かという本稿冒頭で示した問いに答えるためのヒントとなるかもしれない。すなわち、文章はそれが作られた時代や社会の中で、作者が強い問題意識や確固とした理念を抱いて作られてこそ光輝くのだと。

もちろん、当時の評価が後世の評価と一致するとは必ずしも限らない。中唐の韓愈グループの作品でさえ多くは残っていないように、作者がはつきりとした理念を持っていたとしても、後世に受け入れられなければ、歴史の選択によって消えていくということは往々にしてある。例えば本稿でも何度かその名を挙げた樊宗师は、韓愈の手になる墓誌銘によれば、生前龐大な著作を遺したらしいが、現在では「絳守居園池記」を含む四篇の作品を伝えるに過ぎない。

とはいえ、北宋における「怪奇」をめぐる古文復興の展開、とりわけ歐陽脩による太学体の排斥では、確かに理念の無い「怪奇」に対する反感が示されている。また現存する資料の中に、科擧及び太学以外の場合で文章の「怪

奇」に触れたものが見当たらないことから、太学体で答案を作成した受験者自身も、あるいはそれが悪文であることを内心では理解しており、太学や科挙以外ではそうした文章を作らなかつたとも想像される。だとするならば、太学体は文章の作り手すら積極的な意味を見失った「怪奇」ということになる。したがって、北宋の古文に見られる「怪奇」は、中唐以来の一連の流れを汲むと同時に、この太学体の前後で大きな隔たりをも有するのである。

注

- [1] 川合康三「奇—中唐における文学言語の規範の逸脱—」(『終南山の変容—中唐文学論集』、研文出版、一九九九年十月一日第一版第一刷発行) 一 批評用語としての奇を参照。
- [2] この他、『玉海』卷一六「選舉」科挙三・宋朝登科記にも「路授爲長賦、張方平擯斥而其文遂正。劉幾爲僻句、歐陽脩革去而其風復雅。」(路授 長賦を爲り、張方平 擯斥して其の文遂に正さる。劉幾 僻句を爲り、歐陽脩 革去して其の風復た雅たり。)と、同様の記述が見られる。
- [3] このことは、拙稿「なぜ石介は『怪奇』の罪人となったのか」(『中国中世文学研究』第六十七号、二〇一六年三月)で論じた。また、現存する資料に慶暦、嘉祐間に太学体が存在したことを裏付けるものが見当たらないことも、これを傍証しよう。

[4] 『全宋文』(第十九冊、曾棗莊、劉琳主編、巴蜀書社、一

九九一年五月第一版、拠四庫全書珍本初集)に拠る。

[5] 張方平の上奏文には、引用箇所他にも「以爲不合格、則辭理粗通。」(以爲へらく格に合はずんば、則ち辭理 粗通す。)(其舉人程試、有擅習新體而尤誕漫不合程試者。)(其れ舉人の程試、擅に新體を習ひて尤も誕漫に程試に合はざる者有り。)と、科挙の規程から外れた答案を批判する記述が見られる。

[6] 四部叢刊本に拠る。

[7] 南宋・胡柯「廬陵歐陽文忠公年譜」嘉祐四年(一〇五九)に「是月(二月)、充御試進士詳定官。」(是の月、御試進士 詳定官に充てらる。)とある。

[8] 歐陽発「先公事迹」(四部叢刊本『歐陽文忠公集』附録卷五)。

[9] 「北宋仁宗朝科挙改革与『太学体』之興衰新探」(『學術研究』二〇一三年第四期)。なお「翰林逐逐」については、葛曉音氏も同一箇所を出典とする(「北宋詩文革新曲折歷程」『中国社会科学』一九八九年第二期)三。

[10] 「圖」字について、『尚書』では孔安国の伝に従い「地図」の意に解したが、歐陽発「先公事迹」では直前の「倅」字が使役を表すと思われるため、「図」を作成する」という意味の動詞と解した。

[11] 詳しくは、祝尚書『北宋古文運動發展史』(北京大学出版社、二〇一二年二月第一版)第一章 宋初古文・由方輿到失敗(上)——柳開与宋初古文運動、副島一郎「宋初の古文と士風——張詠を中心として——」(『橄欖』第十二号、二〇〇四

年)二、先駆者たちの人格類型と心理を参照。

[12] 四部叢刊本に拠る。「応責」は柳開若年の作であり、そこには文章は難読であつてはならないとする考えが見られる。だが祝尚書氏によると、彼はその後思想的に変質していったという(前掲注「11」書第一章、第三節 柳開「文道一元論」的誤謬参照)。また副島一郎氏は、後年の柳開の文章が古怪なものとなった理由として、こうした思想的変質の他、彼が生来狷介な性格の持ち主であったことや、同様な性格の人間と同志的集団を形成していたことを挙げる(前掲注「11」論文同節参照)。

[13] 『全宋文』(第八冊、曾棗莊、劉琳主編、巴蜀書社、一九九〇年三月第一版、拠『続蔵経』第二編第六套第一冊収録)に拠る。

[14] 四部叢刊本に拠る。

[15] 薛氏の名を、「国子助教河東薛君墓誌銘」は「公達(字は大順)」とする。なお、韓愈らの少し後、晩唐のはじめ頃に薛逢(生没年不詳)という人物がいた。『旧唐書』卷一九〇下「文苑伝下」、『新唐書』卷二〇三「文芸伝下」に伝がある。

[16] このことは、郭紹虞『中国文学批評史』上巻(台湾明倫書局、中華民國六十三年(一九七四)四月初版)第六篇 北宋——文学觀念復古期之二、第一章 北宋之文論、第一節 宋初之文与道の運動、第四目 王禹偁、三一五—三一六頁や王運熙「韓愈散文的風格特徵和他的文学好尚」(『漢魏六朝唐代文学論叢』、上海古籍出版社、一九八一年十月第一版)二、二四八—二四九頁にすでに述べられている。

[17] 四部叢刊本に拠る。

[18] 例えば皇甫湜「答李生第二書」(四部叢刊本『皇甫持正文集』卷四)には「夫文者非他、言之華者也。其用在通理而已。固不務奇、然亦無傷於奇也。使文奇而理正、是尤難也。生意便其易者乎。夫言亦可以通理矣。而以文爲貴者非他、文則遠、無文即不遠也。以非常之文通至正之理、是所以不朽也。」(夫れ文は他に非ず、言の華やかなる者なり。其の用は理に通ずるに在るのみ。固より奇に務めざるも、然れども亦た奇を傷つくる無きなり。文をして奇ならしめて理をして正しからしむるは、是れ尤も難きなり。生の意 便ち其れ易き者なるか。夫れ言も亦た以て理に通ずべし。而るに文を以て貴しと爲すは他に非ず、文なれば則ち遠く、文無ければ即ち遠からざればなり。非常の文を以て至正の理に通ずるは、是れ不朽なる所以なり。)と、より端的に「怪奇」を文彩と看做す考えが説かれている(「夫文者非他」、原作「夫文者非也」。今拠学津討原本『唐摭言』卷五改)。

[19] 祝尚書氏によると、宋初には前漢の揚雄が『易経』や『論語』を模して『太玄経』や『法言』を著したように、古代の文章を真似て作文することが流行っていたと言う(前掲注「11」書第二章 宋初古文・由方輿到失敗(下)——王禹偁与宋初古文運動、第三節 王禹偁的「易道易曉」説、第六節 宋初古文運動的失敗)。さらに祝氏は、柳開の文章を例に、それが『法言』の文章を模擬、あるいは剽窃して作られたものであることを具体的に示している(同書第一章、第四節 「道統派」古文家的古文創作、二、「道統派」古文的「辞洪

言苦」参照)。

[20] 高津孝「北宋文学史の展開と太学体」『鹿大史学』、三十六号、一九八八年)を参照。

[21] 以下、欧陽脩の詩文の引用は四部叢刊本に拠る。

第二節で「嘉祐の太学体」の実作に対し分析を行った際、欧陽発「先公事迹」に引かれた「狼子豹孫、翰林逐逐」の二句を俳典の例とする許外芳氏の説を挙げたが、氏の見方が正しいとすれば、これは太学体流行以前にすでに見られた「學ぶ者の弊」からきたものとも取れる。

[22] この他、景德二年(一〇〇五)の省試で、賈辺(生没年不詳)という人物が注疏の解釈に外れた内容で論を書いたことと『宋会要輯稿』選舉六・貢舉雜錄四に引く嘉定九年六月三日の李楠の上奏文及び『東齋記事』卷一等)も、受験者の競争心理の表れと見ることができよう。賈辺の答案について、時の宰相王旦(九五七―一〇一七)は、「異を立てんとし」、「務めて穿鑿を爲し」たものと非難して、賈辺を不合格にした。

なお太学に関しても、慶曆以降、科挙を通過し官吏となるための主要な手段となったために、競って他者との違いを示すことが学生の間で行われるようになったという(前掲注[9]葛曉音氏論文三参照)。

[23] ただし時文への対抗以外にも、「怪奇」な文章を作る積極的な理由や意味は存在する。それは例えば、副島一郎氏が北宋初期の柳開を中心とする一派について、「俗世間から自らを差別化するとともに、それによつて世人の耳目を引き、世

間に自己の存在を認めさせようとする」ことである。

[24] 北宋中期の文人に関わる「怪奇」として、あるいは『新唐書』列伝をはじめとする宋祁(九九八―一〇六二)の作品が難解と評されたことが想起されるかもしれない。だがその評者を調べると、最も早い時期の者でも蘇軾(一〇三六―一〇九一)や唐庚(一〇七一―一一二二)等、中期の後半から後期にかけて活躍した文人である。また評価が見られる詩文は、いずれも嘉祐二年より後に作られたと考えられることから、ここでは対象外とする。宋祁は『新唐書』編修を境に千篇一律という欠点を含んだ西崑派風の美文から、獨創性を重視する古文へと文学の志向を大きく変えた人物であり、そのことが後に難解という評価を招く原因となった。詳しくは拙稿「古文における『奇洪』——宋祁に対する評価を中心に——」(『中国中世文学研究』第六十六号、二〇一五年九月)を参照されたい。

[25] 増補津逮秘書本に拠る。

[26] ただし、同じく『集古錄跋尾』卷六(『欧陽文忠公集』卷一三九)「唐韋維善政論」には、「余嘗患文士不能有所發明以警未悟、而好爲新奇以自異、欲以怪而取名。如元結之徒是也。至於樊宗師、遂不勝其弊矣。」(余嘗て文士 發明して以て未だ悟らざるを警むる所有る能はざるも、新奇を爲して以て自ら異なるを好み、怪を以て名を取らんと欲するを患ふ。元結の徒の如きは是れなり。樊宗師に至りては、遂に其の弊に勝へず。)と、樊宗師の「怪奇」を強く否定するだけの文も見られる。

[27] 「絳」は絳州(現在の山西省新絳県一帯)。南宋・胡柯「廬陵欧陽文忠公年譜」慶曆四年甲申(一〇四四)の条に「(四月)己亥(八日)、命公使河東、計度廢麟州及盜鑄鐵錢并鑒課虧額利害。七月、還京師。」(己亥、公に命じて河東に使ひし、麟州を廢すること及び鑄鐵錢并びに鑒課を盜まるる虧額の利害を計度せしむ。七月、京師に還る。)とあり、本詩はこの河東視察の道中に詠まれたものと思われる。

日本学術振興会特別研究員DC(広島大学大学院文学研究科)

本研究はJSPS科研費17J03014の助成を受けたものです。